

❖ 書籍 2

中国は海へ進出
歴史的経緯の比較による海洋の変革

書 評

「中国の海に関する歴史は長らく等閑にされてきた分野である。『中国は海へ進出』の中の興味深い解釈による小論はこの知識の欠落を終焉させる。この巻は中国海軍がどちらに指向しているかを理解しようとしている者にとって必携であろう。」

〔ジョナサン・スペンス、イエール大学 近代中国の探索の著者〕

「今日のアジア全般において、中国は話題を占有している。この価値ある新しい本は、中国の海軍の開発について広範囲にわたる評価を1巻の中に納めている。」

〔ワルター・F・ドーラン、米海軍大将（退役）、
元米太平洋艦隊司令官〕

「独創的でよくデザインされた、学問的な小論の集積である。読者は、海へ進出した陸上戦力に特定して焦点を当てた、歴史的なケーススタディに時間を費やさねばならない。これは明らかに中国海軍に関することであるので21世紀中の中国の海上戦力の成長を外部から観測する者の注意を捉えて当然である。」

〔ポール・ケネディ、イエール大学、偉大な勢力の勃興と衰退の著者〕

「海軍の専門家及び海洋関連の役人一人一人に読まれ、そして彼／彼女の本棚に保有されるに値する。」

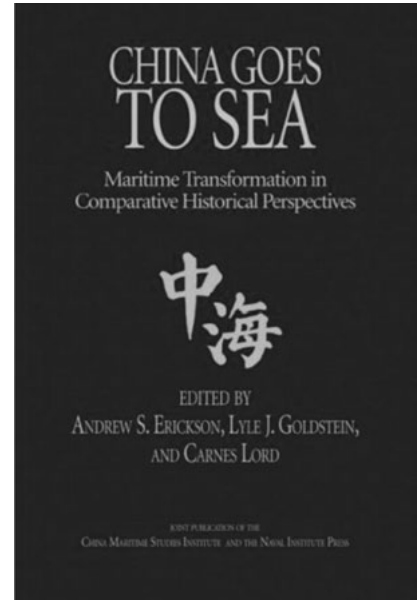
〔ロナルド・J・ケース、Ph.D. 米海軍少将（退役）〕

「傑出した学者のグループによる小論の注目すべき集積である。現在の海軍の開発に光明を投じるため、批評眼に富みかつ洗練されたやり方で、比較解析の方法を適用している。」

〔ドナルド・カガン、イエール大学、戦争の起源についての著者、—先行する著者引用〕

概 説

中国の海への志向変更は、世界的な船舶建造マーケットの中での驚くような上昇、海洋関連貿易商の拡大、海洋エネルギー探索のため広範囲への進出、漁獲船団の拡大、そして近代的海軍の増強から明らかである。この広範囲にわたる、中国の本物の海洋戦力としての潜在力の評価は不偏であり政治に無関係である。中国の孤立という他の研究の見方と異なり、この書は中国を大きな世界の歴史的文脈の中に置いている。著者たちは、全て、歴史上の時代についての権威者であるが、ペルシャ帝国からソビエト連邦までの、時代を通して意図された海洋の変革の事象を研究し、成功あるいは失敗の理由を特定している。



著者について

アンドリュー・エリクソンは米国海軍大学の戦略研究部准教授であり、中国海洋研究所の発起人である。ライル・J・ゴールドスタインは戦略研究の准教授であり、海軍の中国海洋研究所の発起責任者である。カーンズ・ロードは米国海軍大学において海軍と軍事戦略の教授であり、米国海軍大学新聞の編集者である。彼等は広範囲に出版物を出している。(書籍3)

❖ 書籍3

中国のエネルギー戦略 北京の海洋政策への影響

書 評

「我々のアジア・太平洋の将来のため、国家安全保障の専門家にとって広範囲にわたり、多様かつ本質的なこととして、明快に理解しなくてはならない題材である。」

〔トーマス・B・ファーゴ 米海軍大将（退役）元米太平洋軍司令官〕

『中国のエネルギー戦略』は、中華人民共和国のエネルギー開発とその米国への戦略的関り合いの将来に興味ある者、とりわけ両国の海洋開発に特段の興味をひかれる者に必読の書である。この本は中国のエネルギー開発のための展望に、際立って広範囲にわたって、含みのあるあり方で取り組んでいる。中国の将来見通しと展望を評価し、PRCの能力を関連する世界の地方それぞれで解析し、人民解放軍海軍のエネルギー安全保障に関する能力を詳細分析している。米国の政策への関連を解析している最終章を書いている者を含む著者達は、避けがたい不確実性と解析上の不整合を注意深く確認している。バランスを取るため、この本は米国と中国の海洋領域でのエネルギー協調行動の余地を強調している。重要なことは、この事象に関し、読者が自ら詳細な見通しを構築するために必要なデータと解析を豊富に提供していることである。」

〔ケネス・リベルサル博士、アーサー・F・スルナウ ミシガン大学政治学教授であり
国家安全保障委員会のアジアに関する元上席部長〕

「この本は中国の全般にわたる、また海洋関連のエネルギー安全保障戦略の広範囲にわたる評価であり、重要なことは、これが将来の中国海軍の開発の特性と中国の安全保障戦略全般を判定するための、明白で詳細にわたる手引きを提供していることである。」

〔デニス・ブレア 米海軍大将（退役）、元米太平洋艦隊司令官〕

概 説

中国の経済と北京のエネルギー消費の将来形態についての、この時宜にあった解析において、多様な

